

## 第21回母から子への手紙コンテスト 上位入賞作品を紹介します

原文のまま掲載

あなたが生後五、六ヶ月の頃、夕方になると、急に泣いて、抱いても泣きやまない事があつた事を思い出します。あやしても泣き止んでくれません。団地の五階に住んでいたので階段を降りて下まで行きました。あなたの声が響きます。泣き止んで欲しいという気持ちで一杯でした。私も泣きたくありません。

でも、あなたの泣き声は、決して疲れるだけではありませんでした。団地の一階の方が扉を開けて声を掛けて下さり、子育ての悩み等、話をするようになりました。あなたをベビーカーに乗せて、夕方の散歩に行く事もありました。パン屋に入った時、従業員の方が、あなたに動物型のパンをプレゼントして下さいました。心が温まるパンでした。

「夕方泣き」から二十年以上が過ぎ、あなたは、歌う事が好きな子に成長しました。今から考えると、夕方泣いていたのは、歌っていたのかもしれない。あなたが産まれてきて体験出来た事を、大切に感じています。

### 大賞作品 平田みさ子さん(大阪府)



大賞作品を朗読する平田さん

第21回母から子への手紙コンテストの表彰式は12月4日、学びいで行われ、大賞を受賞した平田みさ子さん(大阪府)らをたたえました。表彰式では、八子弥寿男実行委員長があいさつ。八子実行委員長と大竹伸明実行副委員長が各賞の受賞者に賞状を手渡した後、渡辺真一郎町議会議長が祝辞を贈りました。

また、審査委員長を務めた芥川賞作家で福聚寺住職の玄侑宗久さん、元NHKアナウンサーで春日居郷土館・小川正子記念館名誉館長の末利光さん、エッセイストの大石邦子さんが講師し、玄侑さんが「お地蔵さんの悩み」と題して講演しました。

母から子への手紙コンテストは、本町出身の医学者・野口英世博士の母シカが、渡米中の野口博士に宛てて書いた手紙にちなみ、母と子の絆を感じてもらおうと、平成14年から毎年開催されており、全国各地からわが子への愛情をつづった多くの手紙が寄せられています。

今回は、全国から1367点の応募があり、町内の1次選考委員が上位50作品を選出。最終選考会では、玄侑さん、末さん、大石さん、1次選考委員代表の楠美枝子さんの4人が厳正に審査し、大賞などの各賞を決定しました。

## Contents — 【目次】

- 02 年頭のごあいさつ
- 04 Pick Up
- 05 第21回母から子への手紙コンテスト
- 06 まちのわだい
- 08 いなわしろタウンページ
- 16 暮らしの情報広場
- 18 みんなの美術館／食生活改善推進員コーナー

まちの応援マガジン いなわしろ

## 広報 猪苗代

Jan.2023  
1  
No.747

### 今月の表紙

ひまわりこども園保育発表会で白虎隊の剣舞を披露するひまわり組の桑原ひまりちゃんです。【関連6ページ】



【撮影日】12月3日  
【場所】ひまわりこども園

### 準大賞作品 吉田義子さん(北海道)

昌浩へ はじめて手紙を書きます。  
今年も八月五日がきました。毎年一歳を加えて五三年がたちました。

昌浩の手術の朝は雲ひとつない六月の青い空でした。必死につないできた望みの糸がぷつぷつと切れてしまいました。それから六月の空は哀しみの色となってしまいました。

昌浩は小さな体で病苦に耐え、この手術を越えたら元気になれると信じていましたよネ。健気な昌浩をおもう時、ただく「ごめんなさいネ」と呪文のように思い続けてきました。

五七歳になった姿を想像しても突然の別れとなった三歳十ヶ月の元気な姿です。

夢をみました。小さな昌浩が大ききなほうきで笑顔いっぱいでお掃除をしていました。

母は八四歳になりました。日本海の見える田舎に住んでいます。夕景は美しいです。山の彼方に消える落日は神々しいです。残照の赤い一筋の海路をたどると昌浩に会えるといつも思っています。昌浩会いたいです。母。